National Maritime Research Institute

博物館紹介シリーズ

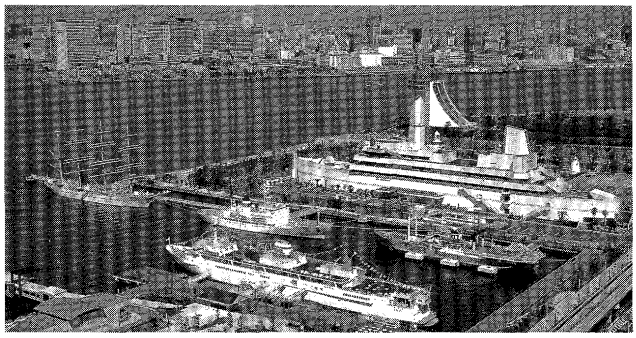
船の科学館

船の科学館は、老若男女で賑わう東京お台場の一角にある。東京の新橋駅から新交通「ゆりかもめ」に乗って、15分で「船の科学館駅」に到着する。途中、レインボーブリッジ付近から、赤い帽子を被ったエントツの船の建物を認めることができる。この船のエントツは、同時に灯台のようにも見える。

船の科学館は、海と船の文化をテーマに昭和49年に造られた海事総合博物館だ。海運、造船、港湾、警備救難、防衛など幅広い分野の貴重な実物資料や模型が多く展示されている。特に実物の舶用ディーゼル機関が据えてあるのは圧巻といえよう。

さらに、「Q＆Aシアター」を代表とする美しい映像と音響で描かれる「シアター」や、「ラジコン船コーナー」、「操船シミュレーション」などは、見学者を参加させるアトラクションの取り入れと、展示方法とによって、海と船の過去・現在・未来を楽しみながら学ぶことができるようになっている。また、それぞれのコーナーに用意されている「もの知りシート」で、見落としを補正することもできるようになっている。

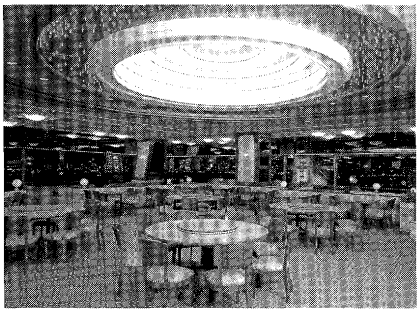
さらに、屋外展示物がいろいろあるが、初代南極観測船「宗谷」と、別館フローティングパビリオン「洋蹄丸」が船の科学館の脇に係留されている。洋蹄丸の中に入ると、昭和30年代の青森が再現されていて、あたかもあのときの「おまわりさん」や「おばさん」達が声を掛けてくるようで驚かされる。



広い展示場を巡るとやや疲れるかもしれないが、地上70mの展望塔に昇って東京港の大パノラマを見たり、豪華客船のダイニングを想わせるレストランで食事をとって一時の休息をとることもできて楽しい。コンテナ船やジェットフォイルなどいろいろな船の出入港を見ながら食事するのも船の科学館ならではの醍醐味である。

船は人類の文化と経済の発展に大きく貢献してきた。特に四面を海にかこまれた日本は、古来から海を利用し、輸送を船に委ねてきた国である。これらを学び、我が国の関連産業に対する理解を深めるのに、船の科学館は大いに役立つことだろう。

この夏休みには、お友達や家族と一緒に、「船の科学館」へ出かけてみませんか。



(財) 日本海事科学振興財団　船の科学館
〒135-8587　東京都品川区東八潮3番1号
電話　03(5500)1111
http://www.funenokagakukan.or.jp

屋外展示物

1. フローティングパビリオン　羊蹄丸
青函連絡船として、永年にわたり北海道と青森を結んできた“羊蹄丸”を丸ごとリニューアルし、フローティングパビリオンとして誕生しました。船と人が織りなす豊かな文化と海の神秘を体感型アミューズメントとして公開しています。
2. 南極観測船“宗谷”
“宗谷”は昭和13年耐氷型貨物船として建造され、太平洋戦争を経験。その後は引揚船、灯台補給船となり、昭和31年11月からは日本初の南極観測船として昭和37年4月まで、6次にわたる南極観測に活躍しました。その後昭和53年退役するまで海上保安庁の巡視船として活躍、昭和54年5月から,船の科学館前に係留され永久保存展示されています。
3. 戦艦“陸奥”主砲
日本海軍に所属した戦艦“陸奥”の主砲です。
4. 戦艦“大和”模型
史上最大の戦艦“大和”の1/20の模型です。
5. 海底ハウス“歩号一世”
昭和43年に民間の手でつくられ、居住実験が行われた海底ハウスです。
6. 超電導電磁推進装置
世界初の超電導電磁推進船“ヤマト－1”に搭載された推進装置です。
7. 半没水型双胴実験船“マリンエース”
昭和52年10月完成した日本で初めての半没水型双胴実験船です。
8. 潜水艇“たんかい”
大陸棚海域における潜水調査を目的に建造された小型潜水艇です。
9. 二式大型飛行艇
昭和15年12月日本の航空・造船など、あらゆる技術が総結集されて誕生した大型飛行艇です。その性能は、すべての面で当時世界一でした。
10. 大瀬埼灯台
明治12年に、東支那海、朝鮮海峡を航行する船にとって重要な位置にある長崎、五島列島の大瀬崎に建てられた、数少ない西洋式大型灯台の一つです。
11. 東京灯船の灯器
船の上に設置された灯台で、昭和22年、東京港の入口を示すために使われました。
12. 安乗埼灯台
明治5年に三重県安乗埼に建設された灯台で、現存する木造灯台としては日本最古のものです。

NII-Electronic Library Service